

語り継ぐ宝物

長森中学校 1年 尾関 俊星

サツ、サツ、サツ、

静かな夜道に、三人の歩く音が響く。

「ねえ、やっぱりやめない？僕、明日でもいいと思うんだけど。」

僕達の中で一番怖がりな信夫が、また弱気なことを言いました。

「お前、本当に弱虫だな。仕方ないだろ、俺の予定で空いてるのは、今日しかないんだから。お前らも行くよな、宝探し！」

僕と信夫は、「う、うん」と言うしかなかった。リーダーの勇は、宝探しなどになると、いつも真剣になつてしまう。

事の発端は、昔、僕のお父さんが、神社の裏山に洞穴を見つけ、その中に宝物を隠したということ。そのことを僕が話したら、好奇心旺盛な勇が、勝手に行くことに決めてしまったのだ。まあ、結局今日しかない花火大会に行く予定も、そのせいで台無しになってしまったんだけど、いよいよ裏山についた。洞穴へは入り口が草などでおおつてあつて、そこから入ることができた。

洞穴の中はとても暗かった。お化け屋敷などが平気な僕も、さすがに背筋が寒くなつてきた。「お、おい洋助。さすがに、暗いな…。」

勇が、ちよつと震えた声で僕に話しかけてきた。勇も怖いんだ。でも、強がりな勇にもこんな一面があつたなんて、ちよつとびっくりした。

洞穴を進んでいくと、道が二つに分かれていた。どちらへ進めばいいかは、勇の根拠もないカンの判断で、すんなり決まった。何分くらいたつただろうか。分かれ道からそんなに遠くないはず。その時、妙に足がくすぐりたい。しかもしたから「チュウ」なんて鳴き声、それも一つじゃない。もしかしてと思い、三人で同時に下を見てみた。そこには丸い耳と、その下に目が二つ見えた。これは間違いなく…！

「ぎゃあーネズミ〜！〜」

と言つて一番に駆け出したのは信夫だった。それにつられて勇も僕も、一目散に駆け出した。

後ろからネズミが追ってくる音がする。僕たち三人は必死に逃げた。分かれ道まで戻つてくると、もう追ってくる音はなかった。見失ってくれたみたいで安心した。

結局右が正解だったらしく、信夫はもう魂が今にもぬけそうな顔をしていた。

右側の道を歩いていくと、先にかすかに光が見えた。

「やった！出口だ！」

といつて一番に駆け出すのも、もちろん信夫だった。光を追って、その先に広がっていたのは…

パン！パン！

そこには、今まさに行われている花火大会の花火が打ち上がっているのが、真正面に見えた。

サツサツサツ…後ろから何かがくると思い振り向くと、なんだお父さんか。

「綺麗だろう。お父さんがこの洞穴を見つけた日も、ちょうど花火がとてもきれいだったから、自分だけの花火の絶景スポットにしたわけなんだ。だから誰にもバレないように、入り口を草などでおおって隠したけど、自分は一年に一回、必ずこの日にここに来て、花火を見ていたんだ。でも、中学生になってからは用事が増えて、行ける機会がなくなってしまっただね。たぶんその間にネズミが入ったんだろう。まあ、これがお父さんにとつての宝物なんだけどね。どうかな？」

勇は宝物が予想してたのと違っていたみたいで、ちょっと残念そうだったが、裏山からこんなにも綺麗な花火を見ることができた…ということ、僕達三人とも満足感で終わった。僕も大人になったら、こんな綺麗な花火を子どもにも見せてやりたい。そう思えた。